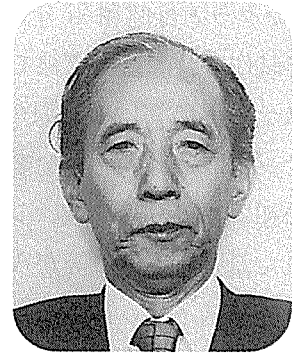


近代化遺産とPC



本 岡 順二郎*

我が国にとって歴史上、芸術上価値の高い建造物、絵画、古資料などは有形文化財として指定され、文化庁がその保存と活用をはかっている。文化財の保護行政は明治4年の古器旧物保存法に始まり、古社寺保存法、史跡名勝天然記念物保存法、国宝保存法などを経て、法隆寺火災を契機として制定された文化財保護法に至る120年を超える歴史をもっている。

したがって、建造物を文化的遺産として保護する考え方は国民に定着している。法の対象とするもの以外でも多くの建造物が地方自治体の指定を受け、町起しを兼ねた保存活動が行われている。

これらの保存活動は一般に明治期以前のものについて行われてきたが、最近は昭和初期の建物についても保存の必要性が認められている。建物の滅失年数が20年を切るといわれる建替えが続いた結果、文化的価値の高い建物が急速に失われつつあるためである。

また、工業化日本を築いた工業製品を近代化遺産として保存するため、日本版スミソニアン博物館を建設しようとする通産省の計画も伝えられている。これも広い意味の文化財保護活動の一環といえる。

近代化遺産とは近代化がもたらした工業製品だけではなく、これを生産するための工場、動かすためのエネルギー施設や流通施設などのインフラストラクチャを含んでいる。したがって、土木・建築建造物もまた重要な近代化遺産である。横須賀製鋳所遺構、室蘭製鋼所、長崎くろがね橋、琵琶湖疎水第1トンネルなど有名建造物から函館市の現存最古のRC電柱まで含めれば調査対象は膨大である。調査は当面明治期に始まり、後の時代に継続して多くの記録がデータベース化されるものと思われる。

建造物の保存は施設の更新、開発に対しては阻害要因であり、一般に経済活動と両立させることが困難な場合が多い。特に土木構造物では遺産としての価値が高い場合でも利用中のものについては保存、修復および活用の程度を定めることが難しいことから、構造物の価値基準を客観的な手法で求めようとする研究も行われている。

以上のような建造物の保護活動とPC建造物はどうにかかわっていくのであろうか。

PC建造物は初期の研究期を含めても50年ほどの歴史をもつに過ぎず、近代化遺産の対象となるのは将来のことであろう。しかし、PCが現代社会を支える建造物の先端的分野に貢献していることを考えれば、PCの記録が必要となるのもそう遠くはないように思われる。

よく知られるように、日本最初の道路橋（昭和26年発注）は七尾市のプレテンション長生橋であるが、当時七尾造船所内に造られたとされるプレテンションベッドが利用されたのであろうか。

* Junjiro MOTOOKA : 本協会会長、日本大学教授

◇巻頭言◇

建物としては吉田博士による小松市役所のプレテン床版（昭和 26 年）が最初である。ポステンでは東京駅プラットホーム 7, 8 番線の上屋であるが、使用されたマニエル工法の緊張器具等はその後保存されているのであろうか。

PC マクラ木は昭和 27 年に本格発注されたが、前年に試作発注、これに先立って 20 本ほど国鉄の津田沼で試作され、東海道線で試験されたといわれる。第 1 号の製品は残されていないのであろうか。

ポステン橋の初は福井県の道路橋十郷橋（昭和 28 年）、鉄道橋では信楽線の第 1 戸川橋梁である。ラーメン橋では大阪府の金剛大橋（昭和 31 年）、水路橋では大井川水路橋（昭和 33 年）、ディビダーク工法の初は相模湖嵐山橋、レオンハルト工法では吉井川橋梁（昭和 35 年）と続く。これらの工事に用いられた緊張ジャッキ等が残されていればりっぱな技術史の資料となる。

プレキャスト PC 建築では国鉄浜松町駅上屋（昭和 30 年）が最初であり、本格的な PC 建築として淡路島の南淡庁舎（昭和 31 年）が阪神大震災に被害も受けず現役で活躍している。

以上のような初物を続けると大阪市の PC 舗装（昭和 33 年）、横浜市の PC タンク子安調整水槽（昭和 33 年）、連続合成桁の名神愛知川橋（昭和 36 年）、万国博の PC 吊床版および斜張橋など、現在に至る多くの初の建造物が続く。技術的価値が高い建造物はさらに多数である。

PC に関する記録は本協会誌、PC 建協年報および社史などに相当量蓄積されており、上記の記録もこの受売りであるが、系統的な記録ではないので精粗の差があり周辺との関係も不明なことが多い。また、40 年もの年数を経ると当時の先達諸先輩から証言による記録を集めることも難しくなっている。

優れた PC 建造物を後世に伝えるためには存在を知ってもらうことと記録を残すことが必要である。

建築学会はその機関誌の建築雑誌で都道府県ごとに歴史的芸術的に重要な建物の概略を数年間にわたって連載し、会員の好評を得た。また、本協会誌ではパンフィックコンサルタンツ 広実正人氏の「PC ウォッチングのすすめ」東京編（Vol. 30, No. 1, Jan. 1988）が解説と写真で掲載されている。

組織的に記録を残すことは日本人にとって不得意な分野のようである。江戸の昔から焼跡に槌音高く再建を繰り返してきた忙しさに記録の余裕はなかったのかも知れない。

本協会誌 1978 年 1 月号に「日本におけるプレストレストコンクリートのルーツ——PC 創生期を偲ぶ座談会記録——」が海上秀太郎氏（前ピー・エスコンクリート（株）社長）が保存されていた昭和 34 年 3 月録音のテープから起こして掲載されている。吉田徳次郎、関 慎吾、猪股俊司、吉田宏彦、海上秀太郎、平山復三郎、仁杉 巖、宮崎義成、上村義夫の各先生による座談会であるが、その最後の部分を再録してこの稿の締めとする。

海上 資料がもしございましたら、なるべく昔の資料を貸していただいて。

吉田(徳) そしてプレストレストコンクリート技術協会として残しておけば後の何かになる……。

海上 どうぞお気づきの点がございましたら。

平山 資料は君、返さないといかんよ。

海上 勿論そういたします。

平山 資料ってやつはどうも。ずばらにするのが得意だから。

吉田(徳) これから先、技術協会が大きくなったら本箱を作って、もう少し段々大きくなるに従ってご覧になる部屋でも作るようにして、やっぱり、資料は急に集めるって集まりませんから、またこういう機会を作って皆さんのお話を承りたい。

どうも今日は、お忙しいところを誠にどうもありがとうございました。